今月の窓

ツバルという国

昨年末のスマトラ島沖の巨大地震と津波による被害は，20万人を超す死者と道路や家屋の破壊，水道・電気・通信等インフラの寸断により過去に例のない自然災害となった。今後，衛生状態の悪化から疫病の発生など二次災害も予想されており，最終的な被害は予想することも出来ない。津波はスリランカ南西，インド洋上の，海抜２メートルに過ぎないモルジブにも押し寄せたが，護岸工事のお陰で被害は最小限にとどまったと報道されている。

津波のニュースを聞きながら，ツバルという小さな島国のことを想った。ツバルは，オーストラリアとハワイの中間，赤道よりやや南に位置する９つの島から成る南太平洋の国である。さんご礁の堆積が隆起して出来た島は，標高差があまりなく，高い場所でも海抜４メートル，平均で１メートル程度といわれている。そんな島に10メートル超す波が襲ったら，結果は容易に想像できる。今回地震の影響はなかったようであるが，ツバルを巡る状況は深刻である。島に自生するタロイモの一種であるプラカ，ヤシ・パパイア・バナナなどのフルーツ，周辺海域でとれる魚を食し，自給自足の生活を送ってきた１万人の国民の生活が，海面の上昇によって危機に瀕している。海水や海流，波などによって陸地の面積が削られる海岸線の侵食や，内陸の地面の下から噴出し一帯を水浸しにする洪水が，日常の生活基盤を破壊している。海岸線の侵食によってヤシの木が倒され，洪水のたびに海水が主食のプラカの畑や住居を浸水している。島自体が物理的に沈む前に生活そのものが成り立たなくなるとして，2000年２月，ツバル政府は全国民の移住を決断した。

スマトラ沖地震に限らず，近年世界各地で干ばつや大洪水など異常気象の影響が頻発している。加えてイラク戦争など人為的な原因による自然と生命の破壊が続いている。はるか宇宙から眺めると，いま地球は病んでいるに違いない。この地球を一つの有機生命体としてとらえる考え方に「ガイアの仮説」がある。ガイアとはギリシャ神話の神様で，世界の始めの混沌とした天も地もない状態で最初に誕生した女神で，大地の象徴であるとされる。「ガイアの仮説」はイギリスの生物，物理学者であるジェームス・ラブロック博士が1960年代に提唱した理論である。生命が誕生してから太陽の温度が25%上昇しているにもかかわらず，気候が比較的安定していることから，地球の気候と物質構成を常に一定にし，生命にとって快適な状態を保つような調整システムが存在する，というものである。ラブロック博士は最近次のように言っている。「ガイアにとって我々人類の存在は，とても重要です。我々はガイアが生んだ最新の生き物であり，ガイアの意識を担う存在なのかも知れない」「地球が一つの大きな生命体であるということに気付けば，何を大切にし，何をやめるべきかという道徳的なことも自ずと見えてくるのです」（ドキュメンタリー映画「ガイア・シンフォニー」第４番，龍村仁監督）。

ツバルという国が海面下に沈んでしまうのは避けられないようである。その主な原因が，先進国の排出する二酸化炭素による地球温暖化の結果であるとしたら，私たちはどう考えればいいのだろうか。海水面の上昇は，沿岸部に人口の集中した日本にも深刻な影響を及ぼすことが明らかである。私たちが何を大切にし，何をやめるべきか，私たちの生き方そのものが問われている。

（(株)農林中金総合研究所取締役調査第一部長　佐々木隆・ささきたかし）